

タイトル	宮本常一の社会犬忘れられた日本人玄を読む 相互関係のなかの人と人，社会修辞学試論
著者	犬飼，裕一； INUKAI, Yuichi
引用	季刊北海学園大学経済論集，64(3)：9-27
発行日	2016-12-30

《論説》

宮本常一の社会 『忘れられた日本人』を読む

相互関係のなかの人と人，社会修辞学試論*¹

犬 飼 裕 一

「この本を書いた宮本先生という人は、今まで永いあいだ、もっとも広く日本の隅々の、誰も行かないような土地ばかりを、あるきまわっていた旅人であった。どういふ話を私たちが聴きたがり、聴けばおもしろがりがまたいつまでもおほえているかということ、この人ほど注意深く考えていた人も少ない。」(柳田國男*²)

1. 社会が生まれる場所

本稿の課題は、人と人との間に生まれる社会、そして社会をめぐる「語り」について思考を深めていくことである。その際に手がかりとなるのは人間の社会について、より深く探求した古典的な著作群である。

「社会が生まれる」という言い方は、おそらく奇異な印象を与えるに違いない。社会は生まれるのではなくて、すでに存在しているだろう、という考えがその理由である。実はここから「社会」という言葉をめぐる深い問いかけが始まる。では社会はどこに存在しているのか。この問いには、おそらく誰にも答えられない。社会は存在ではないからである。

では、なぜ存在ではない社会が、あたかも存在のように、かなり大きな空間を伴っているかのように思われているのはなぜなのか。誰か「社会」を実際に目にしたことがあるだろうか。あるとしたならば、いったいどこで見たのか。そんな人はどこにもいない。当然である。社会は間違いなく存在ではないからであり、もちろん目で見ることもしない。本稿の課題がここに出発する*³。

当然、社会は存在ではなくて、関係である。

しかし、関係であって存在ではない「社会」をあたかも自明の存在であるかのように考えてしまうのはなぜなのか。不思議である。ただし、誤解のないように急いで言葉を付け加えると、社会を存在であるかのように考える立場を、非難することが本稿の課題ではない。むしろ、この少し考えれば不思議な前提が成り立っている仕組みや過程を考えることこそが課題なのである。

本稿で考察の手がかりとするのは、民俗学者、宮本常一の名著『忘れられた日本人』(岩波文庫、1984年(初版、1960年))である。宮本常一の仕事は徹底した現場研究(フィールドワーク)によって成り立っている。それは研究者と研究対象とがまったく対等の関係にあって、常に新しい関係をつくりだしていくことである。研究者と研究対象の人々は、特定の結論を発見するのではなくて、常に結論をつくっていく。それは、まさに日々刻々生み出されている社会そのものである。

文化人類学や社会学、そして民俗学などでしばしば登場する用語に、「参与観察(participant observation)」というのがある。研究者が研究対象となる人々の社会生活に意図的に参加することによって、人々の実際の生

活を知ろうとする方法である。

たとえば、とある集団が長年行ってきた宗教儀式を、傍観者として観察して記録するのではなくて、研究者もまた集団の一員となることを明言し、集団の一員として儀式に参加することで、儀式に対して人々が与えている意味づけを深く知ることが期待される。

ただし、参与観察という方法には、常に「研究」という最終目的が関与する。研究者は特定の人々の現場に行って人々の行動に参加するが、それはあくまで手段であって、目的は研究室に戻って論文——人類学や社会学や民族誌など——を書くことにある。つまり、そこで研究者は本来の意図を（しばしば）隠して研究対象の人々に接近し、彼等の一員であるかのようなふりをして、人々の「真実」を見つけ出そうとするのである。

これに対して、宮本常一の仕事は特定の「真実」を想定するよりも、常に動いていく関係を重視する。このことは宮本が書いた文章のそこそこに現れている。いろいろな調査の成果を書斎や研究室で体系的な理論にまとめるのではなくて、あくまでも現場で、そこの人々と協力し合いながら考えていく。しかも、考えは常に他の考えで上書きされていかなければならない。常に動いているのであって、停止し静止した「真実」を固定しようというのではない。

ここでは研究者と研究対象の間によくありがちな上下関係は一切ない。研究者が研究対象から学び、新たな課題を求められる。特定の目的が最初にあるのではなくて、研究していくなかで途中の経過が逐次文章化される。もちろん文章それ自体が目的というのではない。宮本をめぐるあらゆる要素が互いに補い合っていて、互いに全体となっている。ここでは境界線も次第に消えていく。場合によっては研究者が研究される。しかも、「研究」はしばしば停止し、宮本常一自身が自己の内面に向かう。そして、自己の内面に深く入っ

ていく。

宮本は常に研究活動や研究生生活を自己省察しており、今までに出会った人々、協力してくれた人々を思い出しながら、それらの人々のおかげで以前の自分の考えが変わったことを強調している。研究される対象は決して不動の実体ではなくて、あくまでも揺れ動いている関係でしかない。しかし、揺れ動く関係はそれ自体が、関係する人々の真剣な営みでもある。極言すれば、多くの人々にとってその場の瞬間が全てであるともいえる。しかも、その中に宮本自身も含まれる。

本稿の関心は、宮本常一が現場研究によってつくりだしている「社会」について考察することにある。さらにいえば、現場の体験が「宮本常一」を作りだしていく社会について考えることでもある。この意味で、本稿は現場研究（フィールドワーク）を主とする民俗学や民族学、人類学、あるいは地域社会論の研究ではなくて、どこまでも社会学、とりわけ社会学理論の研究である。それは、言い換えるならば、宮本常一の仕事に「社会」——社会の創出——を追体験する作業である。

ただし、本稿が「社会学」という学科の名前を掲げると、一つの困難な責任を負うことになる。それは、社会学という学問が人類学や民俗学といった近隣領域との間にいかなる独自性を確保するのかという古くからの問題であり、また社会学の視点から近隣の領域についてどのような理解を示すのかという問題でもある。

もちろん、そこには以前から賢明な方策があった。それは境界線をあえて曖昧にしておくことである。境界線が曖昧であることで、互いに着想を融通し合うことができるからである。それは広く「社会」をめぐる知的な探求にとって共有すべき知恵と言うべきだろう。境界線をあえて曖昧にしておくことによって、各々の知は後に直面させられる複雑な状況に対応できるからである。ただし、そ

それぞれの分野の探求は、それぞれの持ち味を發揮して他の分野にとって困難な考察を展開すべきだろう。

2. 寄りあいという社会

宮本常一の名著『忘れられた日本人』（初版、1960年）の冒頭には忘れがたい場面がある。長崎県の対馬に調査に出かけた宮本は、対馬の北端に近い西海岸の伊奈で村の「寄りあい」に参加する。それは、考えられる限りの遠い過去からその地に伝えられてきた実に念入りな秩序形成の方法である。

「私にはこの寄りあいの情景が眼の底にしみついた。この寄りあい方式は近頃はしまったものではない。村の申し合わせ記録の古いものは二百年近いまえのものもある。それはのこっているものだけでもそれ以前からも寄りあいはあったはずである。七十をこした老人の話ではその老人の子供の頃もやはりいまと同じようになされていたという。ただちがうところは、昔は腹がへったら家へたべにかえるというのではなく、家から誰かが弁当をもって来たのだそうで、それをたべて話をつづけ、夜になって話がきれないとその場へ寝る者もあり、おきて話して夜を明かす者もあり、結論がでるまでそれがつづいたそうである。といっても三日でたいていのむずかしい話もかたがついたという。気の長い話だが、とにかく無理はしなかった。みんなが納得のいくまではなしあった。だから結論が出ると、それはキチンと守らねばならなかった。話といっても理窟をいうのではない。一つの事柄について自分の知っているかぎりの関係ある事例をあげていくのである。話に花がさくというのはこういう事なのであろう。」（宮本常一『忘れられた日本人』、岩波文庫、1984年（初版、1960年）、16-17頁。以下、文献名称の記載がない場合は同書）

寄りあいの特徴は、参加者がともかく気の済むまで話すことで、時間制限はない。無理に決めることはしない。参加者は基本的に対

等で、言いたいことを徹底的に話す。興味深いのは、「寄りあい」に宮本常一自身も含まれていることである。宮本の目の前で展開する寄りあいの主題の一つは、実は地域に伝わる古文書を見せてほしいという宮本自身の要望であった。長年共同の書類箱（「帳箱」）に収められた大切な書類を、部外者である宮本に見せても良いか。見せるとしたら場所と時間は。研究に使うという当人の要望で書き写すことは許すべきか、といった問いに、参加者が思い思いの意見を言う。もちろん宮本も丁寧に意図を説明する。そして、いろいろな人物が出入りして延々話し合った末に、老人の一人が、「見ればこの人はわるい人でもなさそうだし、話をきめようではないか」（15頁）と発言して、めでたく宮本は書類を見ることを許される。

書いているのが宮本自身なので「わるい人でもなさそうだ」というのが本当かどうかは信用する他ないが、書類を見ることに成功した以上は、人々の信頼を獲得したのだろう。宮本が「眼の底にしみついた」というのは、それが自分自身も含めた合意形成過程だからである。ここには、確かに研究者と研究対象という関係はなくて、あくまでも寄りあいの参加者として、話し合いによる合意形成が生じているのである。

観点を変えていえば、宮本常一はここで一つの「社会」が生まれる現場に直面している。しかも、自分自身が社会が生まれる場に参加していることを自覚している。それはまさに関係としての社会であり、関係は常に動いている。そして、宮本の文章を細かく見ていくと、ここで「話に花がさく」ことによって生じている社会は、参加者が体験を長時間にわたって共有することによって成り立っている。特定の参加者が知的に優位にあるとか、特別な情報を持っているということによって力関係や上下関係、従属関係が生じるというわけではない。もちろん、人間の能力には多様性

があり、完全に平等な社会関係などというのはありえないとしても、「寄りあい」の主眼はそこにはない。むしろ、すべての参加者が、話したいことを心ゆくまで話し尽くし、参加者に話を聞いてもらい、数日間に及ぶ昼夜の会話によって「寄りあい」という体験を共有することこそが、むしろ目的なのである。だから、体験を共有し合った人々はそこで合意したことに違反しないようにする。当人が数日にわたって参加して出た結論だから、違反するということは数日間にわたる体験を裏切ることになってしまうからである。もちろん参加したすべての人々の体験をも裏切ることになる。狭い濃密な人間関係に暮らす人々にとっては、むしろこちらの方が重要だろう。

ただし、ここから「寄りあい」を理想化することは控えるべきだろう。寄りあいですべてが解決するのならば、江戸時代の日本の農村や山村はすべて無条件に平穏であったということになってしまう。実際には、様々な争いが記録に残っている。しかも、しばしば流血を伴っていた。

ただし、その一方で、「寄りあい」というのが多くの参加者にとって大きな意義のある行為であり、体験であったのは間違いない。たとえば、同じように決まり事を守るにしても、上位の地位にある人々から一方的に命令が下りてくると、集団全員が三日三晩話することがなくなるまで自分の意見や知っていることを話し尽くした上で決定するのでは、当然当事者たちにとっての意味づけも違ってくるはずである。上からの命令に対しては、当然下位にある人々は自分たちの利益のために様々な対策を考える。それが不条理で無理な命令であるならば、できるだけ無害化するか、有名無実化する方策を、それこそ「寄りあい」で話し合うだろう。これに対して、全ての成員が体験を共有して決定したことは、まさに自分たちの決定であって、そこに他者(上位者)は介在しない。

自分たちで決めた決定は当然自分たちの責任であって、責任を問うべき他者が存在しない。他者に責任を帰すことができないならば、その人物は当然無責任で信用することができないということになる。信用喪失は、生まれてから死ぬまで多くの時間を狭くて深い人間関係のなかで過ごす昔の農村や山村の人々にとって、ほとんど死活問題である。それは、移動が多く、人間関係が広くて浅い都市住民には考えられないほどの打撃である。

3. 農地解放の体験

宮本常一は「寄りあい」で問題を解決していく人々の活動に参加しながら、自らもまたその一員として考えている。このような宮本の視点は当人の経歴とも関係しているのだろう。1907年に山口県の周防大島の農家に生まれた宮本は、生涯にわたって農民——当人の言い方では「百姓」——としての自己認識(アイデンティティ)にこだわっていた。当人が何度も書いているように、周防大島は古くから農地のわりに人口過多で、多くの人々が島を離れて各地に働きに行く。豊かではない故郷の都合で、よその土地で働いて、それぞれの土地の人々について知る。各地を巡り歩き見聞を広めるのは故郷の伝統で、自分もまた各地をくまなく歩き回る。

宮本にとって農村や山村の研究は、自分自身についての省察、自己言及の過程でもある。しかも、宮本は民族学の研究と同時に、自ら農地を耕すかたわら、小学校で教え、地域の農業指導にも当り、また戦後の農業協同組合の設立や農地解放にも取り組んでいる*4。『忘れられた日本人』には、農地解放をめぐる長野県諏訪湖のほとりの村での「寄りあい」について非常に印象深い一節がある。

1947年に占領軍の命令で実施された農地解放(農地改革)というのは、一般には、いわゆる「不在地主」の農地を「小作人」とし

て耕していた農民に分配する事業と理解されている。ただし、個々の事例は多様であり、当然のことながら農民の土地に対する思い入れは強い。現場で作業に従事した宮本によると、大規模な地主の農地を分配する作業は比較的容易なのに対し、小規模の場合は難しい。例えば、元々家族で耕していた農地を、戦時期に息子の出征によって働き手が減ったことで他人に一時的に貸与していた場合などは、不条理な結果が生じる。自動的に「解放」が行なわれると、戦地から帰ってきた息子の耕す土地が人手に渡ってしまっているからである。もちろん現実にはさらに多様で、ある程度の資産を築いた地主が、必ずしも正当な手段で土地を集めたとは言い切れない。当然、「寄りあい」は紛糾することになる。宮本は、やはり農地解放事業に取り組んでいた知人から聞いた話を書いている。

「ところが六十歳をすぎた老人が、知人に「人間一人一人をとって見れば、正しい事ばかりはしておらん。人間三代の間には必ずわるい事をしているものです。お互いにゆずりあうところがなくてははいけぬ」と話してくれた。それには訳のあることであつた。その村では六十歳になると、年より仲間にはいる。年より仲間は時々あつまり、その席で、村の中にあるいろいろのかくされている問題が話しあわれる。かくされている問題によいものはない。それぞれの家の恥になるようなことばかりである。そういうことのみが話される。しかしそれは年より仲間以外にはしゃべらない。年よりがそういう話をしあっていることさえ誰も知らぬ。知人も四十歳をすぎると年より仲間にならなかつた。老人から話の内容については一言もきかされなかつたが、解放に行きなやんでいるとき「正しいことは勇気をもってやりなさい」といわれて、なるほどと思った。そこで今度は農地解放の話しあいの席でみんなが勝手に自己主張をしているとき、

「皆さん、とにかく誰もいないところで、たった一人暗夜に胸に手をおいて、私は少し

も悪いことはしておらん。私の親も正しかった。祖父も正しかった。私の家の土地はすこしの不正もなしに手に入れたものだ、とはっきりいいきれぬ人がありましたら申し出てください」といった。するといままで強く自己主張をしていた人がみんな口をつぐんでしまった。

それから話が行きづまると「暗夜胸に手をおいて……」と切り出すとたいい話の緒が見出されたというのである。

私はこれを非常におもしろい話だと思って、やはり何回か農地解放問題にぶつかった席でこの話をしてみた。すると実に大きなきき目がでてきたのである。どこでもそれで解決の目処がつく。」(37-38頁)

何より興味深いのは、この場で、宮本自身が何重にも役割を果たしていることである。まず『忘れられた日本人』の著者として「寄りあい」を研究する研究者であり、同時に農地解放に取り組む公務員でもある。当然、農地解放をめぐる話しあい（寄りあい）の参加者でもあり、「暗夜胸に手をおいて……」という決め台詞で成功したことを、かなり自慢げに書いている。つまり、ここでの宮本の研究は、単なる参与観察ではなくて、「寄りあい」そのものを主導しているのである。

社会学的な興味が深まるのは、まさにこの点である。本稿では、「社会」を存在としてではなくて、関係として捉えることができると論じてきた。宮本が作りだしているのは、まさにここでいう「社会」である。そして、関係としての社会はここでも刻々変化している。関係は生じては消えていく。常に動いており、動いていくなかで新しい関係が生じていく。このような刻々動いていく関係を記していくことが、まさに宮本の仕事である。

しかも、旅の人である宮本は、旅から旅への生涯に千数百の民家に宿泊しており、各々の場で常に新しい関係を作りだしている。そして、作り出された関係は、また別の関係に移行していく。旅から旅へと生きているこの

人物は、まさに関係としての社会を考える上で絶好の具体例である。

本稿の冒頭では、存在ではないはずの社会がなぜ存在のように語られるのかと問うてきた。それは、おそらく多くの人々が長期にわたる安定的、固定的な人間関係を好むからなのだろう。このことは今日の都市社会や産業社会に住む人々についてもいえる。たとえば、就職や結婚は、複数経験することよりも生涯一度であることが望ましいと考えられることが多い。職業を転々とする人物や、結婚と離婚を繰り返す人物は、しばしば例外的な存在と見なされる。各地を移動する職業に就いている人々は「転勤族」と呼ばれ、これもまた例外的な職業生活とされる。しかし、同時にそのような移動や変更を、自由な生き方や進んだ生き方として推奨する人々も大勢いる。まさに賛否両論で、社会学でもまさに係争中である。

4. 御本人たちの立場

このように例を挙げていくと、今日社会学の問題そのものが次々と登場することになる。いろいろな考え方はあるにせよ、一カ所に固定した場所で生活し、最初に就職した会社に定年退職まで勤め、初婚の相手と死ぬまで添い遂げるという考えが、各地に「古い価値観」（あるいは「古くからの価値観」）として観察できることは間違いない。「古い価値観」の守り手は、「保守的なムラ社会」であり、あるいは「教会」のような宗教団体であった。

定番の近代化論や社会変動論の議論では、閉鎖的で自給自足的な伝統的社会の主体を成す農村社会は、開放的で通商重視の近代社会の主体である都市社会に取って代わられる。人口の大半を農民が占める社会は解消され、第2次産業につづいて第3次産業が優位になっていく。過去の因習に縛られた集団志向

の社会は、個人の自由を優先する個人主義の社会に変化するとされる。すでに繰り返し指摘されてきたように、この種の議論は、客観的な事実（史実）をなぞっているふりをしながら、劣った社会から優れた社会への進歩史観を強く打ち出していた。伝統的社会は劣っており、近代社会は優れていると考えるのである。また、明らかにそのような結論に読者を誘導するような書き方をしている。アメリカの経済学者ウォルト・ロストウ（1916-2003）が用いた「テイク・オフ（離陸）」という概念を用いて、途上国の近代化を論じてきた社会学者はしばしば同じ価値観を共有してきた。あるいは哲学者カール・ポパー（1902-94）の「開かれた社会」というのも、やはり同様の価値判断を含んでいる。

社会学的に何よりも興味を引くのは、「近代化」や「社会変動」を掲げて、狭い人間関係からの自由と移動を肯定する価値観が尊重されながら、やはり依然として多くの人々が長期にわたる安定的、固定的な人間関係を尊重しているように見えることである。自由と移動を尊重する一定の期間が過ぎると、人々はまた持続や安定、固定的な人間関係を求めるようになるのだろうか。あるいは、自由と移動を尊重するのはごく限られた社会層の特性であって、多くの人々はそうではないのか。

ともかくも、「自由と移動」か「安定と持続」かという選択は、過去から今日、そして未来に至るまで社会科学と社会学の主要な問題でありつづけるに違いない。もちろんこの問題にとって、宮本常一の仕事は強く示唆的である。

「一つの時代にあっても、地域によっていろいろの差があり、それをまた先進と後進という形で簡単に割り切ってはいけけないのではなかろうか。またわれわれは、ともすると前代の世界や自分たちより下層の社会に生きる人々を卑小に見たがる傾向がつよい。それで一種の悲壯感もちたがるものだが、御本人

たちの立場や考え方に立って見ることも必要ではないかと思う。」(306頁)

宮本の著作でしばしば出会うのは、近代化を旨とする都市住民、とりわけ知識人の視点と、「御本人たちの立場」の鋭い対比である。まさにこれこそが「宮本民俗学」の真骨頂で、社会的に優位にある人々が「下層の社会」、今の言葉でいえば「弱者」に対して勝手に抱いている「悲壮感」(同情や哀れみ)が含んでいる強固な差別意識を、それとなく暗示する。ただし、声高に告発することはない。また、宮本自身が「御本人たちの立場」と完全に同化しているわけでもなく、教育者や研究者や公務員としての視点ももっている。

明らかにいえることは、宮本が伝統的な農村を愛していることである。愛しているからこそ古い習慣を熱心に採集し、記録する。しかし、同時に宮本は農村の近代化を主導する人物でもある。小学校教育や、農地解放や農業協同組合に熱心に取り組んだように、宮本は新しい農村を作りだすのに取り組んでいた。まさにこの多重性や複雑さがこの人物の魅力でもある。この意味でも宮本は移動者なのである。移動者は移動した先で常に新しい人間関係を作りだし、新しい社会を作りだしていく。古い農村を守る人々との間ではその価値に共感し、新しい農村を求める人々との間では、やはりその価値に共感する。

5. 移動者の視点

宮本常一の著作を移動者の視点として捉えることは、魅力的である。それは空間の移動者であると同時に、文化や価値の移動者でもある。このことは宮本の著作の性質とも深く関係している。最初に序論で理論的問題を展開して後で各論に入って最後に結論でしめくくるとい形は取らないで、常に一話読み切りの小文を積み重ねていく。『忘れられた日本人』も、当人が「あとがき」で書いている

ように、雑誌『民話』に連載した小文の集まりで、どこか途中から読み始めても不都合はない。宮本の他の著作も基本は同じで、生涯にわたっておびただしく発表された小文がまとめられて単行本になっている。

いうならば、著作自体が旅なのである。それもあらかじめ計画して列車や宿の予約を入れた団体旅行ではなくて、出たところ勝負の一人旅。現に、毎夜の宿は各所の民家である。旅が旅のきっかけを作り、調査研究がさらに別の調査や研究につながっていく。そして、次から次へと登場する人々が、宮本との間で新たな関係を作りだしていく。

そんな旅の人である宮本は、各地の村々に自分と同じような経験を経た人々に出会っている。

「日本の村々をあるいて見ると、意外なほどその若い時代に、奔放な旅をした経験をもった者が多い。村人たちはあれは世間師だといっている。旧藩時代の後期にはもうそういう傾向がすくよく出ていたようであるが、明治に入ってはさらにはなだしくなったのではなかろうか。村里生活者は個性的でなかったというけれども、今日のように口では論理的に自我を云々しつつ、私生活や私行の上ではむしろ類型的なものがすくよく見られるのに比して、行動的にはむしろ強烈なものをもった人が年寄りたちの中に多い。これを今日の人々は頑固だと言って片付けている。」(214頁)

本稿のここまでの議論にお付き合いいただいたならば、ここで宮本がまさに自分のこととして「世間師」の老人たちに感情投入していることが明らかだろう。それどころか、宮本自身が横綱級の世間師なのである。世間師の人々は若い人々から「頑固」ということで片付けられてしまっているが、実際には誰よりも広い世間を知っている。それどころか、むしろ近代化や都市化、そして学校教育や徴兵制といった近代国家による画一化——いわゆる「国民の創生」——を経つつある若い世

代よりも、はるかに多様で、しばしば破天荒。宮本の本には、地元山口で「長州征伐」に直面して戦った人々や、全国各地に出かけ明治維新、戊辰戦争で活躍した人々が登場する。宮本が若い頃に出会った驚くべき人々の記憶と照らし合わせれば、昔は老人たちの方が奔放で魅力的な人物が多かったのかもしれない。

しかし、それ以上に重要なことは、江戸期、明治期の日本の農村が驚くほど広い世界とつながっていたことである。おそらくこれは日本の民俗学にあつて宮本が特に強調してきた主題でもあるのだろう。先に触れたように、これまでの社会科学の基調をなす近代化論や社会変動論によると、農村は閉鎖的で農民は視野が狭いのに、都市は開放的で都市住民(市民)は視野が広いということになっていたが、宮本はこの種の一方向的な決めつけを批判することに力を入れてきた。逆にいえば、都市の市民は本当に視野が広く、開放的なのか。むしろある側面において広い視野をえて開放的であるだけのことを、人生全般について類推して思いこんでいるだけなのではないのか。

まさにこれは社会科学だけではなく、今日に至る社会の変化そのものへの問いでもある。宮本は今日の人々の常識を揺り動かし、実は多様な日本の村社会、当人も含めた「百姓」の作りだしている社会について関心を向けさせようとする。

それは、私見では、「社会」をめぐる固定した思考を動揺させ、常に新たな可能性を発見しようとする旅の途上である。旅は多くの土地をめぐりながら、性格を変えていく。それは見方によってはある種反科学的な事業なのかもしれない。科学は普遍化と画一化への志向をどうしてももっているからである。科学には、ひどく大まかな概念で現実世界を包括しようとし、包括することで自分が全てを理解し尽くしたような感慨に浸る傾向がある。しかし、実際には世界は多様で、人生ははる

かに豊かである。そんな豊かさと多様さを味わうには、すでに書かれた本の世界に留まっていはいけないうのだろう。宮本の旅は、在来の科学、社会科学には不可能な知のあり方を探求する。

在来の社会科学、そして社会学は、宮本から多く学ぶことができるはずである。とりわけ印象的なのは、宮本が一貫して自己との対比によって思考している点である。この人の思考は、一貫して自己言及的である。今ここで自分が取り結んでいる社会的関係に全力で関わり、その場の人々の問題を解決しようとする。しかも、常に自分自身の問題として取り組んでいる。その上、自己言及は次々と連鎖していく。他者に自己を投入して思考することは、同時に投入された自己に対して他者がその自己を投入することも意味する。関係は相互的で、しかも循環していく。ぐるぐる回る循環は、常に移動している著者、宮本常一を中心として、その場その場で「社会」を作りだしている。

それは、たとえば実証主義的な科学観や社会観による「社会」とは根本から異なっている。実証主義は実在する不動の「社会」をあたかも自然現象のように研究しようとする。特定の「社会」について、事実を積み重ねていけば、「客観的な理解」が可能になると信じる。しかし、その種の信念にもかかわらず、日々刻々を生きて互いに関係し合っている人間は、常に動いていく中で社会を作りだしている。しかも、手強いことに、実証主義的な社会科学が成し遂げた成果をも考慮に入れて動いている。多くの研究者が特定の結論に行き着くならば、多くの人々はその結論をふまえて有利に振る舞おうとするからである。

たとえば、多くの社会学者(教育学者、社会学者、経済学者)が新聞記事やテレビ番組などで、「学歴で社会的地位が決まる社会は不条理だ!」「受験勉強は不毛だ!」と指摘し、激しく非難する。そして、非難すれば

するほど、番組を見た人々や記事を読んだ人々は、自分だけはそこで勝ち残ろうとする。あるいは、自分の子供だけはそんな「現実」において少しでも有利な立場に就かせようとする。競争が激しいならば、敗者が悲惨な状況に陥るのならば、自分はさらに能力を上昇させて打ち勝たなければならない。その結果、ますます「学歴社会」や「受験戦争」を激化させ極端化してしまう。

非難している人々は、敗北者の悲惨さを強調する人々は、自分が客観的に現実を描いているつもりなのだが、それを受け取った人々は、実は別のことを考えている。広く一般に流布する言説は、しばしば当初の意図を越えて、別の意味を帯びていくのである。特定の意図に基づいている語りは、それ自体が人々を特定の結論に誘導している。まさにこれこそが実証主義の描く「社会」の根本問題である。実証主義の人々は、社会が常に動いており、人々が自分に有利な状況を作りだそうと常に努力しているという現実を、しばしば無視しているからである。言い換えれば、人間も人々が作り出す社会も、決してモノではないのだが、実証主義はあたかもモノであるかのように語ることで、社会に対して別次元の訴えかけを行っている。特定の型の語りが、反対に多くの人々を特定の考えに導いているのである。

6. 社会は巨大なモノなのか？

それは、現状の社会が今のまま不変であるという語りであり、訴えかけである。モノとしての社会というのは、常に動いてではなくて、そこにそのまま「ある」——存在する——社会である。たとえば従来の実証主義が、社会を巨大で精密な機械のように論じることが、社会がまさに巨大で精密であることを強調する。しかし、巨大で精密な社会というのはいったい何なのだろうか。それはま

さに無数の人々が共通の目標に向かって一糸乱れず「機能」する「体制（システム）」のことである。これは巨大な企業の性質であり、また近代の軍隊の性質でもある。

ここには一連の信念がある。それらは組織は大きくなれば大きくなるほど良いという信念であり、また巨大な組織は機械（メカニズム）として緻密に設計されていれば緻密に設計されているほど良いという信念である。そして、人々は信念に相応しい語りで自分たちが住む「社会」について語ろうとする。

このことは、第2次世界大戦を勝ち抜いた2つの「超大国」が共通して類似した社会科学を賞賛し推奨したことが多くのことを物語っている。人類史上未曾有の総力戦であった第2次世界大戦は、いうまでもなく国家全体を巨大な戦争機械に変化させる事業（国家総動員体制）であった。巨大な戦争機械に最後まで打ち勝ったのが、アメリカでありソビエトであった。両国の戦争による成功体験は、巨大で緻密な機械（メカニズム）こそが、経済など問題を解決し、国家を繁栄させ、何よりも戦勝で「超大国」としての地位を実現維持する。そして、両国が掲げたのが両方とも「社会」を称しているのは興味深い。ソビエトの「社会主義」と、アメリカの「（構造機能主義の）社会学」である。どちらも社会という機械に特定の目的（機能）を設定し、目的（機能）のために最も「合理的」な体制（システム）を構築しようとする。そもそも目的のために設計されたのが機械である。

今日の人々は、結果として著しく不平等、非効率で政治的にも経済的にも破綻したソビエト社会主義を、単に不合理な体制と見なすことに慣れているが、この種の体制（システム）も当初の意図（目的）は、最も効率的な巨大で緻密な機械（メカニズム）を実現することにあった。また、現に「いかなる犠牲を払ってでも戦争に勝利する」という目的は、2千万の人命を代償としたドイツに対する戦

勝で実現していた。

他方で、戦後日本にも華々しく上陸してきた「アメリカ社会学」というのも、実はアメリカの戦時動員体制の申し子であり、成功に終わった戦争につづく課題は、ドイツや日本などの敗戦国の占領政策であり、ヨーロッパの復興計画であった。そして、戦争に勝つという目的は、アメリカ政府のいう「民主化」や「復興」に変更される。民主的な「(アメリカ)社会」は、非民主的な「(日本)社会」を改造するというわけである。それは巨大な人員を動員することで目的を実現するという機械論的社会観の究極の姿ともいえる。

宮本常一の「社会」は、まさに巨大で緻密な機械(メカニズム)とは対極にある。総力戦(国家総動員)体制を範型(プロトタイプ)とする社会観は、巨大な「社会」(国家)が同じ目的を永続的に追求することを前提とする。これに対して、宮本が探求するのは、人と人との間に生じては変化して消えていく関係としての社会である。社会には特定の目的はなく、社会を作りだす人々にも特定の機能があるわけではない。調査の旅を続ける宮本自身が、農村の人々から調査されることはごく自然である。関係は常に交替し、多数の人員の間の関係は常に交錯する。そして、交替や交錯、変化そのものが人間の社会に自由を確保している。機械の部品として固定されたモノは常に同じ機能を果たすことだけが期待されるが、人間は部品ではない。人間には常に巨大な機械(メカニズム)の部品として振る舞う自由があるが、同時にそんな社会的関係を解消して別の関係を作りだす自由もある。このように考えてみると、例えば宮本が1961年に書いた次の一文も、通常とは異なった意味に解することができるのではないだろうか。

「大東亜戦は批判者たちの言うごとく、軍部の、政府の、ブルジョワたちの陰謀によるものかもわからない。しかし私はただ単にそ

のように考えたくない。圧迫せられた民族の心の底のどこかに、あるいは血の中にその圧迫をはねかえそうとする意欲がつよく動いていたことも、この戦争を初期において大きく拡大させた原因だったと思う。周辺民族のわれわれを支持する気持ちは、われわれの彼等に対する信頼の裏切りのために、われわれからはなれていったけれども、自らの足で歩いてゆこうとする夢はすてなかつた。少なくとも戦場であって聖戦を信じ、自らに忠実であった人々の人間的な努力が、政策や戦略をこえて、同じ民族の心の中にともした人々は明るいものであったと思う。

自らを卑下することをやめよう。人間が誠実をつくしてきたものは、よしまちがいがあっても、にくしみをもって葬り去ってはならない。あたたかい否定、すなわち信頼を持ってあやまれるものを克服してゆくべきではなかるうか。

私は人間を信じたい。まして野の人々を信じたい。日本人を信じたい。日常の個々の生活の中にあるあやまりやおろかさをもって、人々のすべてを憎悪してはならないように思う。たしかに私たちは、その根底においてお互いを信じて生きてきていたのである。」(宮本常一『庶民の発見』、講談社学術文庫、1987年(初版1961年)、15-16頁)

総力戦という「社会」もまた、個々の人々が互いに作りだしている。考えてみれば当然である。人間は個々に意図するのであって、機械の部品ではない。統治者の視点から見れば、自分が操作している巨大な機械が順調に機能したり、機能不全に陥ったり、故障したり、時には大事故(無条件降伏)を起こしてしまったりするということになる。しかし、現場で「聖戦」に取り組んでいた人々の考えは違う。統治者の視点からすれば、全体が目的を達成できずに失敗した場合、すべては失敗であったということになる。失敗は悪であり、悪のきっかけを作ったすべての行動も、悪であるということになる。現場のすべての人々の行動も、すべて失敗で、無意味で、む

しる有害だったということになる。

まさにこれが目的論や機能主義で「社会」について考える場合の帰結である。目的が戦勝にある「総力戦」の場合も、勝利すればすべてが肯定され、すべてが合理的（合目的的）であったということになる。その反対は敗北で、敗北した「社会」は、すべて不合理で反機能的だということになる。設計ミスで走ることができない自動車は、不合理で反機能的だが、戦争に勝てない「軍隊」や、「総力戦」というのも同じように考えられるわけである。

7. 現場で作りだされる社会という選択肢

これに対して、人々の個々の関係を重視する宮本は、各々の現場で作りだされる関係に注目する。当人が書いているように、巨大な「総力戦」に目的論や機能主義を当てはめれば、「軍部の、政府の、ブルジョワたちの陰謀」と解することができるかもしれない。しかし、現場の無数の人々は何も機械の部品のように単一目的に「機能」していたわけではない。敗北して失墜したプロパガンダは、決まって惨めで陳腐なものだが、当時の現場の人々は「聖戦」という言葉にまったく違う意味づけを感じていたわけである。もちろん、一旦陳腐化した古いレトリックをあえて再利用して、昔の戦争を肯定的に再評価しようとする人々の感じている意味とも違う。当時の現場の人々が感じていた意味は、その時点で生じていた社会的関係そのものだからである。

さらにいえば、おそらく宮本は人々が作り出している社会的関係に、普遍的で究極的な真理というものが見えるという考えをもっていない。むしろ、刻々と変っていく人々の関係の中で、意味や解釈が変化していくことに高度の感性を働かしている。「大東亜戦」に関しても、すでに1930年代の初め

から全国各地を旅して回っていた宮本には、負戦後の「批判者たち」とは異なった現実感があった。だから、「私はただ単にそのように考えたくない」というのである。

現実と現実感は多様であり、しかも各々の場で異なってくる。ましてや数億人を巻き込んだ総力戦にあつては、ごく単純な「目的」や「機能」からのみ説明できるわけではないし、また宮本のように現場を歩き回っていた人間が納得する理解も得られないだろう。さらにいえば、戦争を「軍部の、政府の、ブルジョワたちの陰謀」とのみ説明しようとする「批判者たち」の議論もまた、結局、目的論や機械論で社会を捉えようという点では同じである。つまり、日本の戦時動員体制を率いていた人々の目的を、勝利した外国の目的に取り替えただけなのである。これに対して、「私はただ単にそのように考えたくない」という宮本には、特定の目的はない。

目的があるとするならば、関係を構成するすべての人々に目的があり、しかも個々の人々も日々刻々変化している。生涯にわたって同一の目的を探求する「個人」や、そんな「個人」からなる組織、そして、そんな「個人」からなる「社会」などというのが、人間にとって異様な前提から成り立っていることは、今日の社会学理論において、すでに繰り返すまでもないだろう。生きて常に変化する、常に動いている人間は、機械ではないし、機械の部品でもないからである*5。

人間が自ら人間として自己言及するとき、あるいは場合によっては、自分が不変の存在で一貫した目的を追求する「個人」であると自覚することもあるだろう。しかし、先に引用した宮本の文章をまねるならば、「たった一人暗夜に胸に手を置いて、私は少しも自分の人生の目的を変えておらん。私の親も不変の個人だった。祖父も不変の個人だった」と断言できる人は多くないだろう。

人間は複雑であり、変化していく。世代を

越えていけば、変化の度合いは一層激しくなる。変化する人間という前提は、いってしまえば、当然すぎるくらいである。ところが、ヨーロッパに由来する近代の社会科学は、当然であるはずの変化する人間をますます固定化し、時代を追うごとに、まるで不変の物体であるかのように論じようとしてきた。

背景には、社会科学がますます大きな組織に魅せられてきたことがある。理由は簡単で、巨大な精密機械のような社会を考えようとする立場からすると、社会という機械（メカニズム）の部品である人間が常に変化していたのでは都合が悪い。むしろ常に同じで、耐用年数（寿命、設計寿命、定年）が尽きるまでは良質な部品として「機能」していた方が好都合なのである。このような社会観では、あくまでも特定の少数の人々が計画し、設計して、さらに管理しなければならない。「社会」にはそれぞれの領域に機能があり、統括し管理する機能を果たす人々は、末端で単純作業に明け暮れる人々とは別なのだという理解が根底にある。

少し前の社会科学で流行した「システム」という考え方は、まさにこの典型で、同じ人間が構成する「システム」が、まったく別様の構成要素（コンポーネント）で成り立っているかのように理解されていた。もちろん、その理想像（参照対象、参照組織）は成功する巨大多国籍企業であり、祖型を遡っていけば第2次世界大戦に勝利した軍隊と戦時動員体制である。無数の人間機械（マンマシン）が上層の統括者の計画と指示の下に一条乱れず機能し、大きな成果を出す。原子爆弾を作った「マンハッタン計画」の名前をあげれば、それ以上の説明は不要だろう。

8. 自己言及という旅

宮本常一という旅人に触発されて、本稿の議論も社会科学方法論の問題に行き着いてし

まった。宮本の旅は、日本列島に暮らす無数の人々が、決して部品ではなく生きた人間であり、また「日本社会」というのは巨大な機械（メカニズム）でもなければ、特定の目的をもった「システム」でもないことに行き着く。もちろん、この人物が機械論や目的論（システム論）への批判を行ったわけではないし、それらに代わる方法論を打ち出そうとしたわけでもない。

むしろ、宮本は人間としての自分自身に問いかけることで、人々が日々刻々作りだしている社会について考えていたというべきだろう。そのもっとも見事な例は、各地の農村の「寄りあい」に参加しながら共に作りだし、時に主導権まで握ってしまう姿である。それは「参与観察」でありながら、単なる「観察」ではない。しかも、決して固定的な結論に向かおうとしない。宮本の持ち味は結論や帰結ではなくて、過程にあり、揺れ動く相互関係にある。

たとえば、「実践者」という言葉を当てはめれば、宮本常一のある重要な側面を捉えることが出来るだろうか。しかし、通常、実践者というのは何かの固定的な原理があって、それを現場で行動に移す人々という意味が強い*6。特定の宗教や社会思想を普及させ、それらにとって好ましい「社会」を建設したり、好ましくない状態を変えたりするといった活動をする人々である。これに対して、宮本の場合、特定の原理が固定されているわけでも、特定の社会思想を信奉してそれを普及しようとするわけでもない。この点は、宮本を「実践者」と呼ぶ場合、注意すべきだろう。

むしろ、旅の途上で次々と出会っていく現場で、そこにいる人々とやりとりを続けること自体が優先である。当然、宮本自身の考えも人々の影響を受けて変化していく。変化していく過程の方が、帰結よりも重要だからである。そこには自分自身もまた旅先で出会う人々と共通の価値観を共有しているという自

覚がある。

それは、まさに自己言及の過程であり、自己言及の揺れ動きである。視点を変えていえば、宮本常一の研究に、「他者」はいない。自らも「百姓」を自称する研究者が、「百姓」の人々を生涯にわたって研究する。つまり、この人の本に登場する人々は、どれも自己の分身なのである。そして、大勢の「宮本常一」が互いに関係し合いながら、次々と社会を作りだしている。無数の人々について語りながら、実は自己言及している。自分と自分たちが何者であり、どうやって生きているのか、何を考えているのか、何が望みなのか、何が幸せなのか、不幸なのか、それらの理由は何なのか、それらすべては変化するのかしないのか。答えを得ることよりも、問い続けることの方がはるかに重要な過程がつづいていく。あえて「目的」を見出すならば、問いがつづいていくことが目的なのである。

問いの停止は、「百姓」が消えることである。現実を生きて相互関係することがなくなれば、消える。文字の世界で記録されるのは、しょせんは過去の社会的関係についての記録であって、関係そのものではない。

そして、宮本の自己言及は、民俗学に従事し、文字によって「研究」を作りだしていくこと自体に向かっていく。

「これまで回顧して来た年よりたちは文字を知らないか、知っていても文字にたよる事のすくない人たちはばかりであった。文字を知らない者と、文字を知る者との間にはあきらかに大きな差が見られた。文字を知らない人たちの伝承は多くの場合耳からきいた事をそのまま覚え、これを伝承しようとした。よほどの作為のない限り、内容を変更しようとする意志はすくなく、かりにそういうもののある人は伝承者にはならなかったものである。つまり伝承者として適しなかったから、人もそれをきいて信じまた伝えようとする意志はとぼしかった。その話している事が真実であつても古くから伝えられていることと、そ

の人の話が大きくくいちがっているときには、村人はそれを信じようとしなかったものである。そして信じられるもののみが伝承せられていく。」(260頁)

自己言及者としての宮本常一の偉大さは、まさにここにあらわれている。それは「文字にたよる事」が著しく多い自分自身と、「年よりたち」の間の断絶をくりかえし思い知る過程である。この断絶があるからこそ、宮本の仕事は決して完結しない。おびただし著述を残したこの人は、「伝承者」たちにとって自分が他者であることを自覚せざるをえない。しかし、同時に自分もまた同化しようとする。不可能なことを繰り返し試みる。試みること自体が重要なのである。それが宮本の旅なのだろう。

自分がよその者——他者——であることを自覚しながら、同化しようとする。旅から旅へと移動していく旅人は、その土地でしばしのあいだ受け入れられ、心地よい関係を作りだそうとする。誰も旅に出れば分かることだが、慣れないよその土地にあって人は、現地の人々と仲良くしようとする。当然だろう。異境の人々と喧嘩するために旅に出る人はいないからである。

9. レトリックに依拠しない人々

このように考えてくると、社会修辞学の問題に行き着くことになる。それは、もちろん終着点ではないが、重要な経由地である。修辞学（修辞法、レトリック）は、まさに文字言語の発達と共にあった。そして、文字による語りは常に新しさを求める。今までの人々が語ったのとは別の形で語ることが尊重され、常に新しい言葉（修辞法、レトリック）が生み出される。それは文字言語の宿命である。同じ事を同じように書いているだけでは、読者が飽きてしまうからである。

これに対して、宮本がいう「伝承者」たち

は、反復を厭わない。同じことを同じように語るここそが、ここでは価値なのである。「レトリック（修辞法）」という言葉をあえて使うならば、固定したレトリックを延々と継承していく人々である。口頭言語の名手たちは、常に同じことをかたること、つまり同じであることによって「村人」の信頼を勝ちえる。新奇な物言い（レトリック）は、むしろ信頼を失うことなのである。研究者としての宮本は、毎度「百姓」としての自己との食い違い、亀裂を感じるのだろう。

宮本常一は、ここで通常の文字言語の限界を自覚している。学問は文字言語を用いて記述する知の営みであり、それ以外ではない。学問として「百姓」に接近しようとするならば、どうしても限界に突き当たる。

そして、さらに宮本の文章を注意深く読んでいくと、村人たちにとって、「真実」であることよりも信じられることが重要であることが強調されているのに気づく。さらにいえば、「真実」という観念そのものが文字言語の世界の住人の作りだしたものであることに気付かされる。ただし、不注意な読者ならば、だから遅れた農村の人々は何時までたっても無知なのだといった印象を抱くか、あるいはよそ者に不信の目を向けるムラ社会の閉鎖性を非難したくなるだろう。しかし、宮本の考えはそこにはない。

むしろ、村人にとって重要なのは、自分たちが互いの関係の中でその場で作りだしている「信じられるもの」なのである。ここにはおそらく近代科学の知と伝統的な農村社会の知の違いが現れているのだろう。実証主義に代表される科学の知は、確実な根拠によって事実や理論（法則）を同定していこうとする。その場合、重要なのは事実の確実性であり、誰が何時どこで検証しても同一の結果が出るということである。

これに対して、宮本の伝える伝統的な農村社会の知は、人々の相互性に依存している。

そこでは、人々が長年にわたって共有してきた伝承と一致することをいう人物が語ることが「信じられるもの」である。つまり、知識は属人的な関係なのである。さらにいえば、ある意味で知識は常に作りだされているともいえる。たとえ文字に起こした内容が遠い過去からそのままであったとしても、それを語り共有し合う人々の体験は、今ここで生じたものである。

当然のことで、文字によって記録されない知識は常に語られ続けられなければすぐに消えてしまうからである。常に語られなければ消える知識、それは「社会」が常に作りだされては消えていく様子を連想させる。今日の人々は文字の形で可視化され固定された知識に慣れて、それを当然だと考えているのだが、元来知識は目に見えるものではない。もちろん言語も目に見えない。目に見えないものを可視化するのがシンボル（象徴）であり、その代表が文字である。逆にいえば、文字によって可視化される以前、知識は耳から入っては口から出ていく他者との相互関係であった。

このように考えていくと、宮本が探求しようとした「伝承」や「伝承者」たちの社会が、文字言語に全面的に依存する学問の知に対して、強く自己主張していることが分かってくる。それは視覚に依存しない、目に見えることを必要としない知のあり方である。そして、多くの人々は宮本が紹介する知に対して、それが少なくとも不可能ではない知であることを実感する。

視点を変えていえば、文字に依存しない「伝承者」の知というのは、人々が「信じられるもの」と考えると同時に、それを体験しているともいえる。知ることは同時に、それをありありと体験することでもある。繰り返し語られる口承文学は、それを聴く人々にとっては今ここで起こっている体験と、少なくとも当人たちにとっては等価なのである。

人々は自分たちの目の前で語り手が語る物語を、その場でまさに体験する。その体験は反復によって成り立っており、反復によって「信じられるもの」となっているのである。

これに対して、文字に書かれた知識は、むしろ自分たちとは別の人々、「他者」に力点を置いている。文字を解さない人々にとっては今ここにいる人々との関係が事実上すべてであるが、文字を解する人々は誰か別の、過去にどこかで文字を書いた人々が介入することを許しているともいえる。言い換えれば、古来の「われわれ」だけの世界に、新しく「彼ら」や「著者」が強力に入り込んでくる状況である。宮本は、文字を持つ人々とそうではない人々の大きな違いに強い関心を抱く。先の引用の少し後に次のように書いている。

「文字を持つ人々は、文字を通じて外部からの刺戟にきわめて敏感であった。村人として生きつつ、外の世界がたえず気になり、またその歯車に自己の生活をあわせていこうとする気持ちがつよかった。」(261頁)

「文字に縁のうすい人たちは、自分をまもり、自分のしなければならぬ事は誠実にはたし、また隣人を愛し、どこか底ぬけの明るいところを持っており、また共通して時間の観念に乏しかった。とにかく話をしても、一緒に何かをしても区切りのつくという事がすくなかった。「今何時だ」などと聞くことは絶対になかった。女の方から「飯だ」といえば「そうか」と言って食い、日が暮れば「暗うなった」という程度である。ただ朝だけは滅法に早い。

ところが文字を知っている者はよく時計を見る。「今何時か」ときく。昼になれば台所へも声をかけて見る。すでに二十四時間を意識し、それによって生活をし、どこかに時間にしばられた生活がはじまっている。

つぎに文字を解する者はいつも広い世間と自分の村を対比して物を見ようとしている。と同時に外から得た知識を村へ入れようとするとき皆深い責任感を持っている。」(270-271頁)

自分たちの関係がすべてで「外部」を持たない非識字者と、常に外部に拘束されている識字者の明らかな違い。「いつも広い世間と自分の村を対比して見ようとする」という姿勢は、教育学にあっても、社会学にあっても、他のあらゆる学問にあっても無条件に優れたこととして評価されてきた。それは、開明的で「啓蒙」された人間であり、一言でいえば「近代人」である。しかし、宮本の文章を注意して読んでいくと、それが無条件に肯定されているわけではないことに気づく。近代人は、常に外部に拘束されており、また外部の視点から自分たちについて考える。言うならば、他者の視点で自己言及するのである。

このことは、無数の文書や書物として、そしてデータとして「知識」に対面している文字社会の人々とはおおよそ異なった知のあり方を暗示する。文字で書かれた文章を読む人々は、多くの場合、「この著者はこう考える」という視点に立って文章に対処している。読者と著者はあくまで「他者」であり、他者の考えにすべて同意する必要などない。もちろん、他者の体験をそのまま共有する必要もない。時には、書き手の技量によって、ありありと情景を追体験することもあるだろう。しかし、それは主に芸術の世界の問題とみなされる。人々は、映画や芝居を見て涙を流しても、それが自分の実体験だとは思わない。それと同じで、文字によって書かれた文章は果てしなく積み上がっていく「他者」としての知識なのである。

社会修辞学の問題は、人々が文字を介して知識を蓄積していく過程に関係している。さらにいえば、文字言語が人々の意識、さらには「自己」をも分割し、分断していく過程も視野に入ってくる。

10. 自己言及という社会

宮本常一の探求は、微妙な関係の上に成り

立っている。当人は、農村の「近代化」を請け負う改革者や教育者であり、また文字言語で「民俗学」を建設していく研究者でもあるのだが、同時に「百姓」とも自称する。ごく勝手な想像で物を言うならば、これらの微妙な関係を解決していたのは、おそらく旅だったのだろう。同じ場所に長く留まっていたのでは、官吏や研究者としての宮本と、「百姓」としての宮本がぶつかって困難に陥ってしまう。たとえば、各種の事業を成し遂げ、立派な著作も刊行し、最終的に地域行政の首長として荣誉に輝くことはできたとしても、そうになってしまっただけは一介の地域権力者でしかない。それは宮本の生き方ではない。見方を変えると、文字を自在に操る権力者が、文字を知らない「年よりたち」を一方向的に調査し、教育し、支配する構図に行き着いてしまうからである。

むしろ、宮本は農村の近代化に取り組みながら、同時に近代化によって失われていく「忘れられた日本人」を記録するために旅を続けていた。それは何らかの権威や権力として結実したり結晶化したりする仕事ではなくて、常に探求していく過程なのである。おびただしい量の宮本の著作は、まさに過程そのものなのである。さらにいえば、宮本には文字を持った権力者たちが農民に対して及ぼす作用について特別な感性が働いている。そんな感性をもった宮本は、「戦後」の日本で登場した学校教師の「労働運動」に驚くことになった。

「農業は百業の基で尊いものだと思います。ここで一所懸命に働いているところ、農業よりは一段上にあつて、農民よりはよい暮らしをし、村人たちから「先生様」とあがめられていた学校の教育者たちが「教育者は労働者である」と宣言して、世人を、とくに農民をあつと驚かした。農民にとっては、先生は労働者とはおよそ縁の遠いもののように思っていたのである。教育は聖職であり、教師はいつも

人の師表にならねばならないというのがそれまでの一般の人の考え方であった。だから給料のことなど口に出して言わないものだと思っていたのが、給料引上げ闘争をしたり、政治的な闘争に血道をあげるようになると、世の親たちはたいへん戸惑ってしまった。」(宮本常一『生きていく民俗 生業の推移』、河出文庫、2012年(初版、1965年)、15-16頁)

このように書く宮本は、もちろん「教師」の立場に立ってはいない。むしろ、教師を「先生様」といってあがめてきた人々とともに、その豹変ぶりに驚いている。しかし、本稿のここまでの議論をふまえるならば、教師が「文字を持つ人々」のまさに代表であることに考えが及ぶだろう。外の世界で「先生様」があがめられる「聖職」であるならば、村の教師もそうであり、外の世界で「労働者」「頭脳労働者」と呼び始めるならば、すぐにそう変わる。

自身も小学校教師の経験を持つ^{*7}宮本が教師たちの豹変に驚いたのは、当人が属する文字を持つ人々の生き方と、そうでない人々の違いを思い知っているからだろう。先祖代々同じ土地で耕して暮らしている農民は、文字を持つ人々のように高速度で変わることはできないが、変わらないで済んでいるともいえる。方々旅して回る先で出会う「百姓」の人々は長い継続の中に生きているが、「先生様」の一員である宮本自身は激しく変わる外の世界に翻弄されざるをえない。

それは、おそらく文字として記録され、表現される「知識」を専門に扱う人間の背負うべき宿命なのだろう。ごくおおよっぱな印象を記すことを許されるならば、文字の知識はある種の人々にとっては至上の価値だが、それ以外の大勢の人々にとっては強い違和感の対象なのである。今日に至るまで、世界中の教師が、本稿の筆者も含めて、教え子、学生が「本を読まない」といって悩む。教師の仕

事は多くの人々を自分たちの仲間である文字を持つ人々に育て上げることである。しかし、実際には様々な障害があり、失望がつきまとう。仲間を増やすことは容易ではない。

その理由を考える上で、宮本常一が文字に記す人々の記憶は何重にも興味深い。古い西洋由来の比喩を用いるならば、文字を持たない人々は光のない暗闇に暮らしていた。あるいは暗い洞窟の中で縛られて、かすかな光に踊る影——幻影——を見続けてきた。そこに登場するのが理性の光で、光は広い外の世界の存在を知らせる。いわゆる「啓蒙」がこれである。理性の光で解放され、自由になった人々は、自由の手がかりとして文字を必要不可欠とする。逆にいえば、理性の光を知らない人々は、無知で愚かで不自由な奴隷状態とみなされてきた。もちろん、それは宮本の考えからは遠い。しかし、宮本自身が旅を通じて「啓蒙」の考えから遠ざかっていったと解することもできる。

それは分裂や矛盾をまさに自分のこととして自覚している知の働きである。「文字を持つ人々」の多くは、あたかも自分は無関係であるかのような態度で矛盾したことを主張がちである。たとえば、一方で、大企業の巨大な機械（メカニズム）こそが現代社会の主人公であると考えながら、他方で、大きな組織（メカニズム）の部品のようにってしまった労働のやりがいのなさや、「人間疎外」を非難する。多数の人々の負担で多くの人々よりも恵まれた生活を送っている人々が、恵まれない立場の人々に言葉の上で同情する。競争に打ち勝って成功しろと要求しながら、平等にしろとも要求する。しかも、多くの人々は矛盾に無自覚である。

これに対して、宮本はどこまでも自分の問題として分裂や矛盾を引き受ける。文字を持った人々が陥る問題について自覚しながら、膨大な文献を書いていく。しかも、当人はそのことの意味を痛感している。これが宮本の

知である。

また、宮本常一を「読む」ことは、「社会」と「知識」の問題を、一層深く考えるきっかけとなる。まさにこれこそが本稿の意図なのだが、宮本のおかげで「知識」というのが決して普遍的でもなければ固定的な存在でもないということ、様々な形でありうるということ、改めて知ることができる。宮本にとって知識は単に文字言語で表記されたものではなく、同時に過程であり、また関係なのである。たとえば、以前に言っていたことと矛盾することを言うならば、その場にいる人々に矛盾をとがめられる。とがめられた人は、少なくとも何らかの省察をするだろう。そして、毎度矛盾したことばかり言う人物は、信用できないということになる。知識は常に他者との対話を想定しており、他者との協力によって作られていく。自分だけではどこか遠いところにおいて、漠然とした「他者」について場当たりに矛盾したことをいうことはできない。

現に、知識は「寄りあい」で何昼夜もかけて語り尽くされる会話であり、また「伝承者」が語る話を追体験する体験でもありうる。人々との関係として知識は作られ、変化し、それによって社会が作りだされる。そして、知識の変化が社会の変化でもある。そもそも社会は人々の間に作りだされる知識でもあるからである。すべての人々が非識字者であった村を想像すれば、そこに登場した識字者の意義はおおよそ理解できるだろう。それは閉じた「われわれ」の循環に介入してくる「他者」との回路を持った人物たちである。

多少議論が飛躍するが、社会科学が一般に「近代化」と呼ぶ過程は、まさに「他者」との回路を豊富にもった識字者が主導権を握り、非識字者たちの「われわれ」の社会関係を駆逐するか、あるいは果てしなく弱体化していく過程であるともいえる。

そして、知識の主人公は「われわれ」から、

「彼ら」へ移動する。そして文章の著者たちは漠然とした「彼ら」について書くようになる。しかし、同時に完全に他者について記述しているのかといえ、実はそうではない。そこに登場するのは自分たちもふくめた漠然とした一般者である。たとえば、社会学者が「市民」とか「国民」と呼ぶ人々がこれにあてはまる。

すると社会科学というのは、人々が密接な人間関係から少なくとも一旦離れて自己言及する知のあり方と考えることもできる。究極的には自分自身について考えていながら、あたかも自分と無関係な「他者」について考えているかのように書く。しかも、肝心の「社会」はそれを作りだす人々の意識によって動いていく過程である。人々は互いに自己言及しながら社会を作りだし、同時に「自己」をも作りだしている。そして、相互的に作りだされた「自己」から自分たちの作っている「社会」について自己言及している。

その上、文字に書かれた知識としての社会科学は、人々の暮らす社会の外部の存在として人々の間に介入してくる。つまり、宮本のいう「文字を持った人々」は、社会科学のような知識を外部の存在であると考えながら、同時に自分たち自身でもあると考えざるをえない。あるいは、自分たちについて、積極的に「他者」「他人事」として考える仕事と見なすこともできる。

ここに決定的に関与しているのは、文字言語の表現法である。それは、「他人事として自己言及する」という修辞法（レトリック）が、文字を持つ人々——「われわれ」——にはほとんど無意識の形で強いている過程である。

まさにこれが社会修辞学の果てることなく深い問題の入口なのである。

(2016年10月17日)

〈注〉

- *1 社会修辞学については、以下の拙稿を参照されたい。犬飼裕一「構築される科学、示唆する科学——科学が語りうること、示唆すること——社会修辞学への道程」、『現代社会学理論研究』（日本社会学理論学会編）第9号、2015年、犬飼裕一「ハマータウンの語り方：ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』をめぐる社会修辞学の試み」、『北海学園大学学園論集』第156号、2013年。そして、日本の伝統芸能をめぐる「社会」を作りだす語りについては、犬飼裕一「美を創る修辞法：白洲正子、社会修辞学試論」、『北海学園大学学園論集』第170号、2016年。実証主義的科学観をめぐる広範な議論については、以下拙著を参照されたい。犬飼裕一『方法論的個人主義の行方』、勁草書房、2011年。
- *2 柳田國男「旅と文章と人生」（宮本常一『ふるさとの生活』、講談社学術文庫、1986年（初版、1973年）、10頁）。
- *3 ただし、ここで本稿の立場について説明を加えなければならない。本稿では、「社会」を存在としてではなくて、関係として捉えている。通常用語法で「社会」というのは、あたかも存在であるかのように語られている。たとえば「日本社会」「現代社会」という場合、どこかに実在する巨大な空間を指し示しているかのようなのである。しかし、それでは「日本社会」というのはいったいどこに実在するのか？ と問えば、多くの人々は日本列島という地理的な概念や、大勢の人々が登場する市街地の様子を思い浮かべるのだが、それらはあくまでも北東アジアの列島であり、特定の都市の市街地であって、「日本社会」ではない。もちろん「現代社会」というのも同じで、これなど具体的な地理的情報も与えられていないから、さらにいっそう思い浮かべるのが困難だろう。しかし、社会科学は「日本社会」や「現代社会」という言葉を頻繁に用いている。少し観点を考えてみれば、まさに「社会」という言葉の不思議さが際立ってくる。「社会」というのは、どう考えても存在ではないのだが、誰もが存在として語っているのである。

ただし、本稿ではこれらの用法を非難しようというのではない。むしろ、「社会」という概念を

「関係」という視点から読み替えることで、これまでとは違う思考の可能性を喚起することを意図している。たとえば、本稿に登場する宮本常一が行っている活動は、存在としての社会を外から観察するのではなく、現場にいる人々と宮本が共に「関係」を創りだしている。まさにそれは宮本常一が創りだす社会なのである。

また、このように考えてくると、社会科学が論じる「社会」というのが、存在（物体、空間、他）としても捉えうると同時に、常に動いている関係としても捉えうることの多面性も視野に入ってくる。社会学も含めた社会科学の問題点は、「社会」という概念の多面性——別の言い方をすれば、両義性、曖昧さ——にあるといえるが、同時に多面性によって複雑な対象に対応できているともいえる。もちろん、この問題の検討は高度に理論的な課題であって本稿の領域を越えているので、別稿でさらに入念に論じていくことにする。

- *4 宮本常一は、1926年に大阪府天王寺師範学校第2部に入学し、1927年に大阪市内の小学校に「訓導」として就職し、1929年に天王寺師範学校を卒業している。後、1948年10月、大阪府農地部の嘱託となり、農地解放と農協育成の指導に当たっている。「宮本常一略年譜」（宮本常一『山に生きる人々』、河出文庫、2011年（初版、1964年）、252頁以下）。
- *5 この問題については、拙著で集中的に論じたので参照されたい。犬飼裕一『方法論的個人主義の行方』、勁草書房、2011年。
- *6 本稿は特定の言葉が特定の意味や内容に確実に対応するという「言語模写説」に立っているわ

けではない。もちろん、ここに登場する「実践者」というのにも、言葉を用いる人々によっていくらかでも解釈替えの可能性はある。

- *7 宮本常一の小学校教育についてのこだわりは、本人が書いているつぎの一文が言い尽くしているのでそのまま引用するだけで十分だろう。

「私が特に村里生活内における躰のことについて調べてみたかったのは、かつて私が初等教育界にあって、教育者として多くの悩みを持っていたことに一つの動機がある。十七歳にして百姓生活を打ち切って大阪へ出、二十歳を過ぎて小学校の訓導となり、和泉の農村で十余年を過した。その間たえず教育の効果を十分にあげ得ないことに苦悩した。そしてその原因の一半はその村における生活慣習や家庭の事情に暗いことにあるのを知った。子供の性癖や嗜好すなわち個性といわれるものは先天的なものもあるけれども、その村の性格や家風によるもの、言いかえれば家および村の生活の反映によるものもまた多いのである。そして郷党の希求するところや躰の状況が本当に分らないと、学校の教育と家郷の躰の間にもすれば喰違いを生じ、それが教育効果を著しく削いでいるのを知ったのである。民俗学という学問を、趣味としてでなく痛切な必要感から学びはじめた動機はこの苦悩の解決にあったのだが、いつかその学問を教壇の上に生かすことはしなくて、教壇はすてて学問に専心するようになってしまった。……」（宮本常一『家郷の訓』、岩波文庫、1984年（初版1943年）、12頁）